

## 第1回「国家の輪郭と越境」研究会

『Mother India』(1927 Katherin Mayo) を読む

2009.4.27.大阪大学世界言語研究センター

担当：小松久恵

### Introduction The bus to Mandalay pp3-10

イギリス帝国第二の都市、カルカッタ表象

\*経済・近代文化の中心地である市街地

- ・「豊かなアメリカの都市にありそうな」近代的、西洋的な建物、公園、庭園
- ・背後にはインド人街、寺院、モスク、市場、入り組んだ路地  
「肩幅の狭い、近眼の世間知らずなベンガル人学生」

↓  
↑

\*土着文化の中心地：カーリー・ガート

- ・バラモンの案内人は「洗練された北イタリアの紳士」のようであり、流暢な英語を話し完璧なマナー
- ・山羊の供犠の描写（血まみれ、周囲の騒音、子宝に恵まれるため四つん這いで血をなめる女性、血で浸した布を胸に押し当てる女性）
- ・肥って毛むくじゃらのサドゥーたちによる物乞い
- ・火葬場面
- ・沐浴場面（体を清め河の水を飲む、ついでにコインを探す、押し合いへし合いの混雑）

英国人神智学者

「カーリー・ガートはインドではない That is not India. 最下層の、もっとも無知なインド人のみがカーリーを信仰しているにすぎない」

ベンガル人バラモン

「カーリー信仰はインドの全階層に及んでおり、ガートを訪れる者の中にはインドでもっとも学識のある重要な人物もいる。」

### Chapter I The Argument pp11-18

「われわれがインドだとみなす地域」

- ・面積：合衆国の約半分
- ・人口：合衆国の3倍
- ・貿易収支（ごく初期段階ではあるが）：1924-25年 25億ドル
- ・ボンベイ-NY間：3週間

昨今の人的活動によって交通網が発達、世界が身近になる

⇔

しかし平均的アメリカ人のインド観 → ガンディー／トラ

それ以上の知識は、プロの伝道者たち (propagandists) からの影響にすぎない

Ex) 軍隊、宗教・神秘的出典、物語、旅行記、小説、詩における「インド」

それが不満でインドへ向かう

「助成金を得ず、中立の立場で、どこにも所属しない志願者」が日常生活を観察することができるのかを見るため

**\* 事実？英国当局からの資金援助も**

宗教、政治、芸術ではなく公衆衛生に注目

Ex) 伝染病蔓延防止策において行政が直面している状況

- ・ 鉤虫対策キャンペーンに対する反応（何がその反応を引き起こしているのか）
- ・ 幼児死亡率低下、生活の向上、教育レベルの向上など政府の取り組みへの反応（支持する／妨げとなっている要因は何か）

以上のいかなる点も「東洋の神秘」で包み隠すことはできない

→ 衛生習慣は世界レベルで他者に影響を及ぼす

旅行計画提出のためロンドンのインディア・オフィスへ（1925年10月）

「古代建築の研究でもなく哲学者や詩人を求めてでもなく、ましてや狩猟のためでもない、誰かに任命されたわけでもなくインドへ赴くのはおかしな存在」であろうが、自分は「単なる詮索好きでもインド駐在官」でもない、ごくふつうのアメリカ市民であり、視察の結果をアメリカで発表したいだけである。

インド各地において、公的・私的、インド人・イギリス人の区別なく非常に優遇され、助力を得ることができた（→真剣な目的をもったアメリカ市民として受け入れられた）

調査に当たっての英国人からの助言

「何をすることにせよ一般化することのないよう気をつけたまへ」

インド各地での活動

\* 訪問先

- ・ インド人／英国人双方の保健衛生官（現場への同行も）
- ・ 各種病院
- ・ 州を越えての大移動：北西辺境州からマドラスまで
- ・ 州長官の視察に同行
- ・ 地方議会／全国会議／法廷に出席
- ・ 市場、中庭、奥の部屋（inner chamber）
- ・ 学校
- ・ インド要人（王女、政治家、行政官、宗教指導者）

\* 学習したこと

- ・ 出産対処、子供と病人のケア、食糧保管、衛生観念
- ・ 様々なカースト／階級の個人習癖（外出先・日常生活）
- ・ 農場／牧場の全般管理

⇒ これらの経験を通じインド人の素晴らしい率直さに触れ、「インドに関して一般化は可能である」

現代的インド人思想家の疑問

「なぜ英国統治が始まってから長い時間がたったのに、われわれは無知と貧困と高い死亡率で世界に知られているのか？」

Sir Chimanlal Setalvad

「この国を苦しめているのは、自発性、積極性、勤勉さの不足である」

## Mr.Gandhi

「自発性と独創性を欠き、並びに無力であるがゆえに、われわれが英国に統治をゆだねたのは正しいことであった」  
公人の自問自答

「熱狂が不毛なのはなぜか。同朋意識、相互献身がすぐに忘れ去れるのはなぜか。寿命が短いのはなぜか。」

「我々の精神部分は傷ついている。魂は傲慢な他者の影に毒されている。英国が撤退したならば、われわれが母なるインドに向ける関心は減ってしまうだろう」

### メイヨーの意見

英国のインド統治の是非は、インドの現状には無関係である。不活発、自発性、独創性、忠誠心、熱意の欠如、微弱な生命力は古来からのインド人の特徴なのである。心身ともに隷属に縛られており、そこから抜け出そうとしない。

### 代表的な問題として

#### ①12歳少女

- ・貧弱な肉体、非識字、無知、衛生観念欠如
  - ・幼年期に出産→病弱な息子→危険な習慣→30歳にしてやつ果てた老人に
- ゆえに男性能力が脆弱

#### ②莫大な人口

- ・おもに農村部、非識字&非識字を好む
  - ・女性教師なしで初等教育を普及させる必要がある（女性雇用はほぼ不可能）
- ゆえに教育普及が遅れる

#### ③型にはめて育てられた心身

- ゆえに死亡率が高く貧困が蔓延

### インド人自身の責任追及

「独立に向けてのインドの発展をうながすのは唯一、インド人の力である。おしゃべりや非難の応酬、責任のなすりあいと時間を無駄にするのではなく、固い決意をもって、心身をめぐって待ち受けている課題に立ち向かわねばならない。」

### これまで明文化されてこなかった議題

＝ 公衆衛生をめぐる問題

- ← インド人；部分的には知っているが本質的な推論や整理を避け、全体像を直視しない
- ← 旅行者；知覚しない、日常生活の表面的な美しさの下を掘り下げる機会をもたない
- ← 英国当局；特に忌避する、他者による対応を軽視
- ← 外部エージェンシー；受益者を励ます手法を受容、自身の利益にこだわり自らの失敗に直面するよりも他者の欠点を繰り返し述べる

⇒ 沈黙や追従の合意の中で、病人は日ごとに衰え、治療・救済を受けずに死んでいく

### この仕事を引き受けたが故に起こるであろう非難

「醜聞あさり、不正、物質志向、思いやりの欠如、嘘、わいせつ」

## Chapter II Slave mentality pp.18-32

ガンディーの言葉

「あらゆることを自治の確立まで先延ばしにするのはやめよう。ゆえに自治が先延ばしになっているのだ」  
「自治を手にはできるのは、勇敢でクリーンな人のみである」

↑

前指導者の影響力が衰えた今、説得力がない言葉

現在；あらゆる政治要綱から噴き出す、母なるインドに献身的な激しい抵抗運動

⇔ しかしインドの子たちはその言葉にふさわしい行動をもたない

・可哀そうなインドは病んでおり、無知で無力だが、加えてその子供も悲嘆に暮れ、互いに争うか怠惰に寝転がって泣き暮らすだけ

・英国統治下のインドでは、一定の速度での発展がみられ、今後も深刻な邪魔が入らなければ 10 年単位での発展が予想可能

Ex) 教育施設、病院、高速道路、橋、灌漑用水、農業地、井戸、穀物ならびに綿の収穫高

この発展のペースは需要に比べて、またアメリカや中国のそれと比較すると遅い

→ 発展速度のアップに必要なのは、教育を受けたインド人による勤勉

← 大衆の状況に関心をもつのはごくわずか

インド人口；3 億 1 千 900 万

英領インド；2 億 4 千 700 万

西洋人；20 万（英軍人 6 万以下、英民公務員 3432、警察 4000 =67432）

現地における全存在（67432 人）—制圧的→ 「slave mentality」の 2 億 4 千 700 万人

しかし英国統治前のインドの状況を見逃すべきではない

・頻発する小競り合い、山賊行為、族長同士の対立／支配

・外国統治に対する弱腰

→ 再び native king が為政者となっても、その支配は短命で全インドには及ばないだろう

ヒンドゥー教にその要因

無気力／無常性（nothingness of things）／来世観

ヒンドゥーの苦悩要素；貧困、病気、無知、政治的無力、劣等感

一般的ヒンドゥー家庭における少女は 8 歳から 14 歳で母親に（平均 14 才）

・数世代にわたってそのように教育されてきており、結果病弱

・無学、家庭祭祀／夫（personal god）への奉仕に関する知識のみ

その夫も幼い妻よりやや年上か、あるいは 50 歳のヤモメ

→ どちらにせよ健康な子孫を残すためには力不足

生まれた子供は病弱で、ケアすべき周囲は適切な衛生知識をもたない

社会制度におけるその立場ゆえに、カーストの高低に関わらず、女性の人生における唯一の関心事は育児出産である

→ そのような環境で育った子供は早いうちから性関係について考えるようになる

男根崇拜 phallic cult の精神性を説く近代的な指導者（＝ヴィヴェーカーナンダ）

「愚か者はただ肉体的な側面のみを見ており、そのことを決して理解しない。」

⇔ 賢者は冷笑するが、教義が遵守されているインドでは宗教は大衆を統制しない

セックスシンボルが存在しなくとも、寺院や宮殿や街中の壁画や彫刻、あるいは女性が歌う歌など、子供の目に入るところで性が描かれている。

ゆえに国際猥褻物取締法（1923年）は多数のヒンドゥーたちに大混乱を引き起こした

⇔ ムスリムは歓迎

→ 例外を改正案として制定「religious purpose は例外として認める」

インド中で魅力的な少年は成人男性の相手か、あるいは売春夫として寺院を定期的に訪れるが、両親はそれを咎めず逆に人気があることをほめそやす

社会階層も知能も関係ない

どのような母親でも娘はうまく寝るように to make her sleep well、息子は雄々しくなるよう to make him manly 育てる

→ in the bed?

医学的に観察した全ての幼児の身体に、この習慣・傾向（＝性にふける？）が見られる

→ 幼少期の思考訓練に影響を及ぼし、恒常的な経験が心身ともに破滅させる

古代ヒンドゥー教の教えでは、幼児婚を聖典で認めていない（しかし議論が起こるたび、聖典に依拠が求められる）

ヒンドゥーの慣習では嫡出子が出来るだけ早く必要とされる

「父が死ぬと儀式を正しく執り行い、薪で父の頭蓋骨を割る役割

性癖同様、そのためにも平均的な少年の性行為は、能力を待たないうちに始まる

一般的習性も世論も、幼い妻（妻たち）との性行為を制限しない

Ex) ガンディーの述懐、13歳で妻と同居を始め性に溺れる

西洋の影響で、幼児婚問題はより頻繁に議論されるようになり、インド人自身も問題視するようになった。しかし行動にはなかなか結びつかず、大半の保守ヒンドゥーは伝統的風習に固執したまま。

わずかなヒンドゥー法が自制を呼びかけるが、性に関するものは存在しない。

Ex1) 著名なヒンドゥー弁護士

「少年時代に父から性病にかからない方法を教わった」

⇔ 禁欲する方法ではない

Ex2) ヒンドゥー神秘主義者

「自分勝手な行為が終わると私はすぐにそのことを忘れる。正しい、正しくないの問題ではない。性行為は錯覚の世界 world of illusion にのみ存在するのだ」

早くからの性行為が引き起こす不能

\* 性能力に関して

・ 平均的な 30 歳ヒンドゥー男性 = 老人レベル

・ 25-30 歳 10 人中 7, 8 人は不能（農民 < 富裕な都市在住者）

← 新聞広告の高価な精力剤による証明

1922年12月29日～1925年12月4日パンジャブ州

11回にわたって政府が現地語新聞を起訴（猥褻な広告に関して）

出版社に猥褻広告の掲載禁止を通告

- ・ガンディーは精力剤を否定「they sap the mind」
- ・一般的には活発な性交渉は暗黙の了解

ex)高地位のヒンドゥー

娘を嫁がせる前に、結婚相手の男性に英国人医師の診断書（性感染症を患っていないことの証明）を要求。

→ 不妊の原因がどちらにあるのかを明確にするため

（不妊はたいてい嫁の責任にされ、娘の不妊は親の恥となるから）

不妊に関して

妻が子供をもうけないと（failure of the wife to give him a child）最後の手段として夫は贈り物をそえて、妻を寺に送り出す（初夜にそうするカーストも）

→ 妻は寺で息子を切望して神に祈り、ある夜、境内の暗闇の中で誰かと接触する

「めでたい！それは神だ！」司祭

→ 帰宅し、子供ができ、生きながらえれば一年後にお礼参り

（境内には供物として持参された子供の髪の毛の山）

多くの事象がヒンドゥーの「隷属精神」を立証している

- ・本物の、持続的なリーダーの不在

インド人はある程度は状況を理解しているが、そこから発展しない

- ・「カルマ、キスマトのせいだ」

- ・衛生状況の悪さを非難

→ 責任の転嫁を考え続け、現実を拒否する

高名なインド人医師

「この国の人々は無節制な性行為が心身に及ぼす悪栄養を理解していない」

結論

幼年期から性に耽溺しているため、インド人は心身共に虚弱であり、貧困と病気に苦しんでいる。だから自治を手にするには、あまりに無力で不安定なのだ。

### Chapter III Marbles and Tops pp.33-41

幼児婚に対するインド政府の姿勢

①宗教に関することには出来る限り干渉しない

②施行しえない法は支持しない

インドの教義（宗教義務、禁忌、天与の権利）に反すれば ⇒ madness / riot / blood

印／英当局の共通理解 = 女兒の結婚年齢を上げる法をヒンドゥーは決して受け入れない

1891年 激しい論争の後10歳から12歳へ引き上げ

総督政府の反応

一貫して引き上げ支持ではあるが、世論からかけ離れた法の成立には警戒

保守派からの非難

「夫婦を引き離すどんな権利があるというのか？」

「我々の古来の理想と伝統に穢れた手をかざしても、我々はそれに従わない」

「英領政府のイギリス人はみな、他の者の進む道に障害物を投げつけているようだ」

## インド人議員の理解

- ・新生児ならびに幼い妻たちの死亡率の異常な高さは、性行為と無理な妊娠が要因
- ・無理な妊娠は母体のみならず生まれる子供の健康にも害
- ・そのような子供は、良い市民 (good soldiers / civilians / outdoor workers / indoor workers) にはならず、社会に利益を与えない

## ⇒ 一連の議論からの結論

大多数のインド人国会議員は、妊娠はふさわしい年齢ですべきだとは論じない。しかし、未成年女子の結婚を禁止すれば、幼い妻や新生児の死亡率の高さが改善されることは周知である。

## 幼児婚禁止に結びつかない3要因

- ① 未婚のまま思春期に達することは社会上／宗教上の罪だというヒンドゥーの慣習
- ② 傷物にならないうちに婚家に送り出さねばならない (特に拡大家族の場合)
- ③ 望みが満たされないというプレッシャーに娘をさらさないようにという親心

## 1925年承諾年齢法への反対意見

### \*ヒンドゥー女性の独自性を強調

- ・他の国の女性とは違う
- ・妻にとって夫は神、どんな社会改革者よりも偉大で、真実で、大切な存在
- ・伝統を破壊しないでほしい

\*幼児婚は貧困層特有の問題になっている、高クラス (higher class) では適齢期が上昇中 (法令化するまでもなく、教育と社会改革の高まりに任せるべき)

## Chapter IV Early to marry and early to die pp.42-50

### 北西辺境州のナワール、承諾年齢法に関する見解

「我々の地域では幼児婚は存在しない」  
「結婚が成立しながら同居を認めない法は不自然」

### 幼児婚への共通認識

「幼児妻は夫の聖なる権利によって、法とは関係なく、導かれるべき」

### 対策は単に書類上にもみ存在する

「民衆は教育を受けるべきだ」

### 多くの審議会では責任転嫁の応酬

「幼児婚をさせているのはバラモンだけだ」  
「そんな慣習に従うのは下の階層のものだけだ」  
「幼児婚による害は誇張されすぎており、干渉するのは愚かなことだ」

### しかし実態は出産時の母親の死亡率に明確である

→ 世界大戦時の英帝国領全ての死亡者数より多く、身体評定も世界最下位

Rabindranath Tagore

*The Book of Marriage* 1926 にて「インド人の理想的な結婚」について述べる

- ・幼児婚を伝統文化として称える「精神昇華の花」「性と物質主義の克服」
- ・インド女性は思春期前にしっかり管理され委譲されるべきである

⇒ つまり

女性は自我に目覚める前に嫁がせねばならない a woman must be married before she knows she is one.

女兒が直面する別の問題としての売春

Ex)マドラス、オリッサにおけるデーヴァダーシー

寺に奉納され、役目が終わると本人は乞食になるしかないが、奉納した両親は何ひとつ失わない

この制度を認めている政府の責任は？

保守的な信心深い人々と深く結び付いている慣習であり、宗教の名の下にある限り制限できない

「デーヴァダーシーの娘たちはカースト男性と結婚できない。故に母親がザミンダールとの関係をアレンジするのだ」

「古代からの存在であり、祝いの場には欠かせない。メイドとしては雇い入れるが、売春婦として少女をあつせんするなどという非道はだれも行わない。なぜ自己責任が取れるような少女のことを、われわれがここまで考えねばならないのか？」

#### Chapter IV Spades are spades pp.51-62

幼児婚の悪影響を最も明示する場所 ⇒ 産婦人科

Ex 1) 北西州の小さな女性専用病院 (purdah hospital)

\*描写

- ・多くの患者にとって入院＝初めての外出
- ・覆い付きの駕籠 (purdah conveyances) で来院
- ・平屋の病棟 (大部屋/個室)
- ・患者の大半が非常に若い

\*来院目的

- ・不妊治療 「陽の当たる場所で生きていけるように」 that buys an Indian wife a place in the sun.
- ・淋菌による骨盤炎症
- ・大腿部の骨折/性器裂傷
- ・精神異常

Ex 2) ボンベイ管区の英国人女医

- ・患者の夫の大半は大学生 (=高学歴)
- ・患者の両親も娘の惨状を理解しながら救出しない

Ex 3) マドラス管区

- ・「この国で大半の女性にとって結婚は肉体的な悲劇だ」
- ・「1人か2人を無事に出産するまでに、少女は感染と酷い待遇で廃人になっている」

⇒ 無理な性行為の糾弾

「彼らにとって(無理な行為を強いる)夫は非の打ち所のないヒンドゥー紳士ですが、私たちからみれば彼は獣です」

使用テキスト

1927 Katherine Mayo, *Mother India*, Blue Ribbon Books, New York.